

浄土

5
1994

巻頭特別寄稿

本間正樹

旅

夏 攸吾

好評連載

吉川英明 利根川 裕 稲葉小太郎

連載講話

高橋富雄

アニミズムを生きる

袖山榮真



法然上人鑽仰会発行

は
じ
め
に
押
し
て
ね、
0
0
8
8。



ゼロゼロ押したら ハッピーハッピー

0088

日本を楽しくする電話

お申し込み・お問い合わせはお客様センターへどうぞ。

0088-82 (無料) / 0120-0088-82 (無料)

■受付時間 9:00~23:00 (年中無休)

0088なら●月々の基本料金は一切かかりません。ご使用になった通話料金だけのお支払いです。●かけ方は簡単。現在お使いの電話機で、市外局番の前に“0088”を押すだけ。●60kmを超える市外電話は0088がおトク。

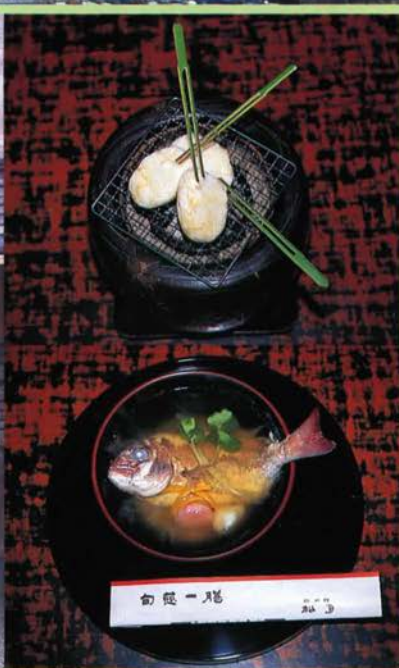
富山の春

写真 夏 攸吾



高さ15メートルを越える雪壁の回廊、立山黒部アルペンルート室堂平

立山の町並から雄大な眺望の立山連峰



白海老の福団子(松月)

大名碗(松月)



富山の土の匂いを……料亭旅館「くれは山荘」



葛きり(くれは山荘)



竹の子刺身(くれは山荘)



岩瀬茶の名料亭「松月」



まだ雪の中……雄山神社祈願殿(立山町)



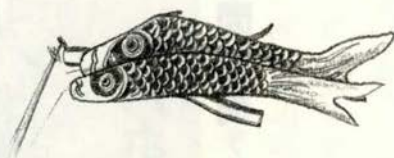
ネタもシャリもうまい(美喜多寿司)



ホタルイカ

浄土

1994/5月号



目次

[カラー口絵] 富山の春……………	写真=夏 攸吾	3
大地に生きる	ナバホ・インディアンと暮らして……………	本間正樹 8
富山を食べて観る……………	夏 攸吾	18
午後の日差しの中で——⑤		
神の使い……………	吉川英明	26
連載エッセイ——⑨		
わたしの校歌物語……………	利根川 裕	34
現代の快僧——その4		
シルクロードに魅せられて……………	稲葉小太郎	40
念仏信仰と武士道(三)……………	高橋富雄	52
アニミズムを生きる……………	袖山榮真	62
編集後記……………		70

表紙題字=浄土門主 中村康隆貌下

表紙撮影=落合泰三

目次・編集後記イラストレーション=田村直巳

大地に生きる

ナバホ・インディアンと暮らして

本間正樹（フリーライター）



ナバホの伝統的な住居、ホーガン。現在では数少なくなりつつある。

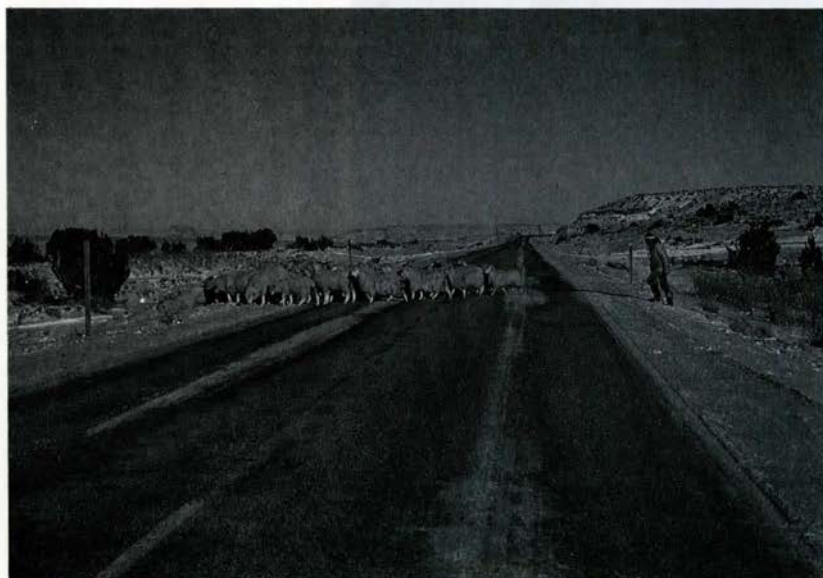


正装したおばあさん。アクセサリーのトルコ石は魔よけでもあるという。

米国アリゾナ州北東部に広がる砂漠地帯。遠くには「メサ」とよばれる巨大な台地が、まるでテーブルでも並べたように連なっている。果てしない荒野——西部劇映画などでおなじみの風景だが、ここが、アメリカ・インディアン
のナバホ族が自治政府のもとに暮らしている保留地だ。

現在、米国内のインディアン人口は、およそ二百万人。その半数が、部族ごとに割り当てられた保留地に住んでいる。アラスカを除く米国本土だけでも、二七八の保留地があるが、なかでも、いちばん広い保留地（九州と四国を合わせたくらい）と、いちばん多くの人口（約二十万人）をもつのが、ナバホ族だ。

私は十数年前、ナバホの老夫婦の家に居候して、毎日、羊飼いの手伝いをして暮らし、以来、二度訪問して、その生活の変化にも接してきた。はじめて訪れたころ、そのあたりはやっと電気が引かれたばかりで、老夫婦は現代の文明社会とはまるでかけはなれた生活をしていた。その家のおじいさんは、羊飼いであるばかりでなく、メディスンマンと呼ばれる呪医師（各種の祈禱のほか、薬草を用いて病氣治療にもあたる）でもあった。おかげで、冬から夏にかけて半年ほ



道路を横ぎる羊の群れ。

ど暮らすうちに、私は伝統的なナバホの生き方をかきまわることができた。

よき事は夜明けの精とともいふ……

この土地の気候は典型的な大陸型で、夏冬、昼夜の気温の差がはげしいのが特徴だ。冬は雪も降るし、気温がマイナス二十度にまで下がることもある。春先には、吹雪と砂嵐と一緒に襲ってくることも珍しくはない。反対に、夏は四十度近くの猛暑になる。ただ、暑いといっても、日本の梅雨どきのような蒸し暑さのないのが救いだ。

ナバホの伝統的な住まいは、丸太をドーム型に組み、上に厚く土をかぶせたもので、「ホーガン」と呼ばれている。内部は砂の土間で大昔の竪穴式住居を思わせるが、なかなかどうして、この伝統的住居は土地の気候に合っていて、夏

はずしく冬は暖かい。やはり、古くから伝えられてきたものには、そこで生活してきた祖先からの知恵が生かされているものだ。

さすがに最近では、コンクリートや木造モルタルの家が多くなり、こうしたホーガンはポツリポツリとしか見られなくなった。しかし、伝統的な儀式やおまじないの場としては、やはりホーガンがふさわしい。そのために、こうしてホーガンを残しておく家もあるのだ。

私は、あいているホーガンを借りて暮らしていたが、冬の夜、薪がパチパチ音を立てて燃えるストーブに手をかざしながら、ランプの炎のゆらめきが周囲の丸太の壁や天井に映る様を眺めていると、何やら懐かしいようなやすらぎを感じたものだ。

ところで、ホーガンの入口は、かならず真東に設けられている。それは、夜明けの最初の光

を迎え入れるためだ。ナバホでは、「よき事」はすべて「夜明けの精」が日の出とともにたらしめてくれるといわれている。そんな言い伝えが簡単に信じられるほど、砂漠の夜明けは壮大で、感動的である。

老夫婦は日の出前から起きて、おじいさんは羊と馬の世話、おばあさんは小屋の掃除をはじめている。太陽とともに起き、夜は早ばやと床につくのが自然の習慣というものだろう。早起きをする、「夜明けの精」が喜ぶと言い伝えられている。このように、何事につけても精霊の存在が意識されることが、ナバホの人びとの精神のすこやかさの秘訣であったように思われる。

りっぱな羊飼になるには……

老夫婦の家では、五十頭あまりの羊を飼っていた。私は毎日、羊たちを追って砂漠を歩いた。



ナバホは母系制社会。娘たちがそれぞれ婿をとりて両親のそばで暮らす。

からだに染まるかと思えるほど真つ青な空の下を、朝日をあびて大地をふみしめていくのは、なんとも気分のいいものだ。しかし、夏になると、爽快な朝の時間はすぐに過ぎ、強烈な陽射しに照りつけられての砂漠の行進は、私にとっては苦行に近くなる。しかし、おじいさんはいつもおなじペースで、ゆったりと羊を追って歩く。歩きながら、ときどき大きな声でナバホの歌をうたう。その歌のおおらかなリズムは、羊を追うテンポとこの広大な砂漠の風景に、よくマッチしている。

おじいさんはほとんど走ったりしない。あたりの地形と羊の動き方を知りつくしているのので、走ったりする必要がないのだろう。たまに急ぎ足になったり、ちょっとした窪みを飛びこえたりするときの身のこなしは、とても七十歳とはおもえない軽快さだ。

おじいさんは五、六歳の少年のころから、夏も冬も毎日毎日、こうして羊を追ってきた。しかし、足腰が丈夫なのは、そのためだけではなく、もう一つ秘訣がある。おじいさんが少年だったころまでは、ナバホの子どもたちはみんな、特別のトレーニングをしていたのだ。

それは、いわば早朝ランニングである。毎朝、日の出とともに起きて、夏はもちろん、真冬でも上半身裸になって、遠くの丘の上まで、それとも大声を出しながら走って往復する。そうすると「夜明けの精」が喜んで、からだを丈夫にし、心をすこやかにし、幸運を授けてくれるというわけだ。

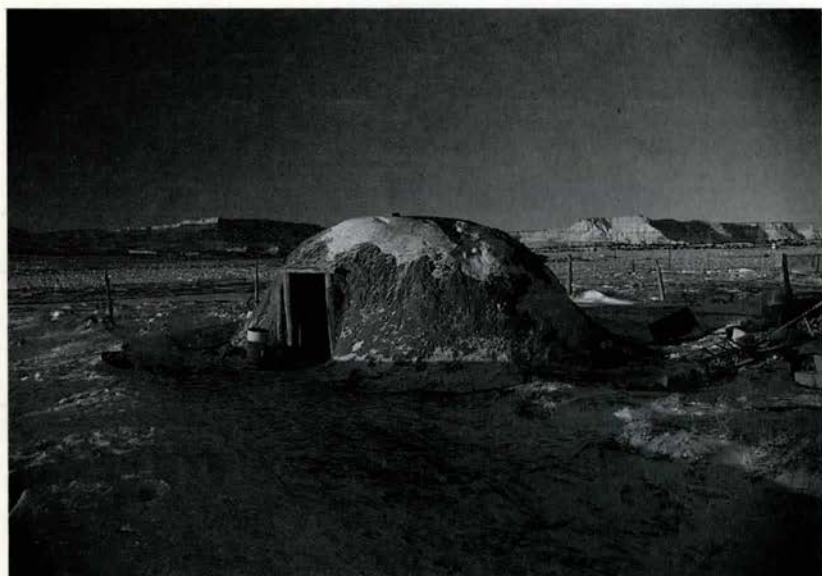
親たちはよく、「未来の駿馬しゅんばと肥えた羊は丘の上にいる」ということわざを使つて、子どもたちを励ましていたそうだ。実際、からだは丈夫でないと、たくさん羊を飼うことはできないし、

いい馬を手に入れることもできないのである。

それにしても、自分のからだを鍛えるために走るとはいわずに、「夜明けの精」という目には見えない存在を「喜ばせるために」走るといふ。そうすることによつて、すこやかな心身と幸運を授かることができる——そんなふうに感じられることを、私はすばらしいと思う。そのもとになっているのは、獣や鳥、魚、虫など生き物はもちろん、草木、太陽や月、石に至るまで、自然界のすべてのものに精霊が宿るという考えだろう。これはナバホに限らず、多くのインディアン部族に共通する考え方でもある。

あるべき調和をとりもどすために

ナバホの人びとの主食は、現在では小麦粉でつくるフライブレッドという揚げパンだが、かつてはトウモロコシだった。主食であつたばか



ホーガン

りでなく、ナバホの祖先はトウモロコシから生まれたというのだから、その結びつきは切っても切れないほど深い。それは、つぎのような話だ。

はじめに、「聖なる人びと」がいた。「聖なる人びと」は、一枚の鹿皮を地面に敷いた。その上に白ワシの羽根と黄ワシの羽根が一枚ずつ並べられ、その羽根の上にそれぞれ白いトウモロコシと黄色いトウモロコシとが置かれた。「聖なる人びと」はそれらをもう一枚の鹿皮でおおった。鹿皮のはしっこから、二本のワシの羽根が少しだけのぞいていた。

東から白い風が吹いてきた。西からは黄色い風が吹いてきた。

「聖なる人びと」は鹿皮のまわりを四回まわった。そのたびに鹿皮のはしっこで、ワシの羽根



メディスマンの祈禱の道具。右端が聖なる花粉の小袋。ほかに矢、やじり、ワシの羽根、水筒、パイプ、煙草袋がみえる。

がかすかに揺れた。

「聖なる人びと」が鹿皮をはぐと、そこに横たわっていたのは、一組の男女だった。白いトウモロコシはナバホの「最初の男」になり、黄色いトウモロコシはナバホの「最初の女」になったのだ。「最初の男」と「最初の女」は夫婦になって子孫をふやした……。

こうした神話がもたになって、ナバホではトウモロコシの花粉がとても重要な意味をもつ。それは「聖なる花粉」と呼ばれ、生命の象徴としてあらゆる儀式や祈禱に用いられる。

神話によると、ナバホの人びとは「聖なる人びと」に、人間としての正しい暮らし方を教わった。いちばん大切なことは、母なる大地、父なる天、そして自然界に生きるすべてのものたちと、調和を保って生きること。その調和が乱

れたときに、干ばつや事故、病気、人と人のいさかいなど、さまざまなわざわいが起こつてくるといふのだ。

わざわいが起こつたとき、あるべき調和をとりもどすため、場合に応じた儀式をとりおこなうのが、メデイスンマンだ。

ナバホのメデイスンマンは、数は減りつつあるものの、依然として人びとの信頼を得ている。おじいさんもその一人で、専ら羊や牛、馬など家畜の病気を治すのを得意としていた。よその家から頼まれると、おじいさんは祈禱の道具や薬草を用意して出かけていく。おばあさんが気分がすぐれないときも、おじいさんが祈禱をしてあげる。老夫婦が向かい合つて、おまじないの言葉をとる姿は、ほほえましくもある。そして、祈禱のあと、おばあさんは重い荷物を一枚脱ぎ捨てたように、元気になるのだった。

祈禱はふつう、「聖なる花粉」やパイプの煙を東西南北、天と地に吹き散らしてその場を浄めたあと、特別の呪文と歌とを精霊にささげる。

「ヘイヘイヤーヘンネンヤー　ハーウエイヤー
ヘイヤー……」

リフレインの多い、割に単調なメロディの歌だ。

「祈禱の歌は、絶対に文句を間違えてはいけないだよ。間違うと、祈禱の力がいつぺんに消えてしまうからね」

おばあさんがいつか、そう教えてくれた。

言葉にはそれぞれ神秘的な力、霊力が秘められている。同じ言葉をくり返し唱えることによつて、その言葉の霊力が高められ、歌や呪文の効力が発揮されるという考えが、ナバホにはある。これは、かつて私たち日本人の祖先の心にも深く根づいていた「言霊」の觀念にはかなら



ナバホ・インディアン保留地内を走る道路。

ない。

文字というものを持つことによって、私たちは多くのものを得たが、一つ一つの言葉の持つ魂というものについては、すっかり鈍感になってしまったのではないか。その意味では、文字を持たず「言霊」を信じてつづけたナバホの人びとのほうが、ずっと言葉の生命を大切にしてきたと見ることもできるだろう。

しかし、学校での英語教育が徹底し、家庭においても英語を使う家がふえつつある現代では、ナバホの言霊の力も弱まってきているらしい。物質文明はナバホの大地にも急速に浸透し、伝統的な生活は影が薄くなった。TVゲームに興じる子どもたちの姿も珍しくない。精霊の存在は、以前ほど意識されなくなってきた。そのために、ちかごろは精霊に祈りが届かなくなっていると、おばあさんはコボすのである。

クロモジのカンジキ



富山を食べて観る

文と写真―夏 攸吾

相手にされない身投げイカ

「ホタルイカも、そろそろ身投げする時期になればね……」

寿司屋の主人と話しているうちにひよいとてた、その言葉を私は聞き逃さなかった。

三月下旬の富山。私は市の北郊、四方漁港に近い寿司屋にいた。この季節、

富山湾の話題といえはまずこれだ。

「今年はどう、獲れてますか」

「いいようですね」

二月半頃から始まったホタルイカ漁は七月までつづく。はしりのいまは高値だが、そのうち漁獲が上がつていけば十分の一以下の安値になる……というような話からだった。

まだ昼どきまでには間のある時間、



薬種商、金岡邸(下)と置き薬、商法の売薬行李(金岡邸)(左)



ほかに客はない。なんてそんなとき寿司屋にいたのか……は、あとして話を。ホタルイカ。近ごろは都会のスーパ―なんかにもでまわるようになったか

ら、たいがいの方がご存じ、ほんの中指ほどのちっこいイカ。これが発光する……碧く光る……でなけりや、これほど有名にやならなかったろう。そいつが身投げするという。

断崖のような高い岸から海へと身を踊らせるのが「身投げ」、人間の構図、ホタルイカ風情にそんな真似がでるか……。漁は沖合いの定置網、獲れすぎて網から船に飛び込んでくるやつをいうのだろうか。

ああ、それね……。三月後半から四月後半にかけて産卵期を迎えたホタルイカが、岸近くまで寄せてくることがあり、それが俗にいう「身投げイカ」。だから雄はいないの、雌ばかり。し

かも、身投げする時機は決まっている、と主人は笑う。

ぽかぽかと暖かい南風がそよ吹いて穏やかな、「なんかぽやあんとして静かな夜、満潮のころだね」、きそうな予感がするそう。このへん「凍れがふつとゆるんで、しんと静かで、降ってきそうなのがわかる」という、北国の雪の予感と似ている。

港にでると、そのときをあてこんだ人たちがいっぱい、酒など飲みながら待ちかまえている。やがて……縮緬波を立てるように海面が盛り上がり……来た、となれば岸壁にたも、網が鈴なり、「掬うなんてもんじやない、突っ込めば入る、バケツに一杯ちよいの間」。

いま地球上に残る最も神秘的な世界、海の不思議を物語るように、ホタルイカの生態の多くもいまだ謎だが、なにか異物に触れる刺激によって発光することだけはわかっている。網とか岸壁とかにぶつかって……碧白く光るさまに「そりやお、興奮」する人々。

ぜひ一度、目撃してみたい現場だが、「こればかりは、いつとは約束できない、そのときになってみなけりや」といわれてしまう。

この「身投げ」話はその後、尋ねるといろいろな人から聞いた。

「身投げイカは相手にしない」ともいう。ひたひたと押し寄せてくるホタルイカの大群、海から、浜に身投げするさま



は、どこまでも汀を彩って明滅する幻想的な光景、「忘れられない」。けれど、そうなつちや砂をかねて食べられないから、膝くらいまで海に入って掬い取るんだそうだ……。それにしても「身投

げ」とは、直截きわまりない。おかしいような、怖いような、気持ちだった。

私は、そんな話のネタもちょうだいしながら、鯨にぎる主人の仕事ぶりなどカメラにおさめる。実をいうと、このたびは著作依頼された旅行案内書の取材。ブルーガイドパック『富山』という、この本には「旅の食卓」と称する企画ページがあり、三十軒あまりの店を写真入りで紹介する、のが主目的。だから、客のない時間を見はからっての訪問になるわけだった。そのために約十日間。

姿勢としては、あくまでも参考までに……。だが、紹介する以上、味の確認

明かり取りがみことな瑞龍寺(高岡市)



は当然。連日四軒から五軒の店を食べ歩けば、私の胃がどうなったか、ご想像いただろう。

雪深い立山の遅い春

詳しくは、夏休み前までには書店に並ぶ予定の本を見ていただくことにして、ここぞよいと内緒にお教えすれ

ば……。

いまホタルイカ談義をした四方の美喜多^{きだ}寿司。それから、ホタルイカの昆布^{こんぶ}じめなどという手間暇かけた仕事をする市内一番町の寿司^{すし}正。魚^{いしや}よし、飯よし、水よしの富山では、銘醸地酒とともに味わう鮎^{あゆ}をまず、あげねばなるまい。しかもこの二つの店^{みせ}がいいのは若い後継ぎがあり、主^{しゅ}がその二世を懸命に盛り立てようとする姿勢であること。

あたりまえ、といえばそうかもしれないが、高度経済成長の無茶苦茶に乱暴な時代、真^{まこと}つ先に忘れ去られていたのが、次代を育てるということだった。バブルがはじけてよかったと想う、第



まだ雪囲いの中……城端別
院善徳寺(左)と三角の雪よ
け。瑞泉寺(井波町)下



一はその反省ができたことではなかったか。どんなに美味な実りも、新しい芽生えがなければ絶えて無くなる。そう

なっちゃあ、もう、おしまいだ……。

あと、磯料理なら岩瀬浜の松月。「富山湾を生簀に」、かつては北前船の大旦那衆を遊ばせた料亭の、白海老福団子、鯛の尾頭付き入り大名碗は、口福の逸品。一方「富山の土の匂いがする」山川の幸なら、呉羽丘陵、合掌民家を移築した料亭旅館くれは山荘。もてなしの心配り、みごとにまでに端正……といったところ。これだけは、覚えておかれて損はない。

私はといえば、晴ればどこからでも望める立山連峰の雄大無比、懐かしい「置き葉」越中富山売葉の歴史を伝える旧邸店舗など、合間をみても腹ごなしに散策の日々。

立山信仰の布橋（立山町）



それでも、やりきれなくなつてついに一日、砺波平野から立山へと車を走らせた。

北陸路も大社寺の多いところ。海に近い高岡の禅堂、明かり取りの結構みごとな瑞龍寺では、境内の雪もほとんど消えかかっていたけれど。城端の善

徳寺、欄間彫刻井波の瑞泉寺ではまだ、雪囲いが解けていなかった。信仰深い人々のため、本堂前に組まれた三角の雪よけが重く湿っている。

華麗な曳山祭が各所に見られるのも、またこのあたりの特長。展示館に飾られ出番を待つ花山車たちが、あくびをこらえているようにも見える、そんな陽気だったか……。

立山に入ると、さらに春は遅い。立山信仰の拠りどころ、岩峯寺里宮の雄山神社前立社壇、芦峯寺中宮の祈願殿にも人影はなく、広域分散型テーマ自然博物館の体裁をとる立山博物館の、野外展示施設もほとんど、半分はまだ雪に埋もれている状態。むかし立山が

立山のおせい春 三月末の立山博物館、有馬家住宅（左）と雪のないときの有馬住宅（右）



女人禁制だったころの人界と天界とを分かつ境、姥堂川に架かる朱の欄干の、布橋だけが雪山を背景に浮き立っていた。

雪歩きのかんじき、を売る店がある。ほんとは閉まっていたらしいのだが、のぞいたら開けてくれ、見ればクロモジの木を撓げて手作りの品。よくできている、いつ役に立つとも知れなかったが、私は行きがかり上買わざるをえない。それも雪のせいだった。

信仰登拝の山、冒険登山家の山だった立山を観光大衆の山にした、立山黒部アルペンルートは、日本一の落差豪快な称名滝で知られる標高九七七メートルの美女平から始まる。

これより二四五〇メートルの室堂平まで駆け登る高原バス、四月二十五日の開通に向け、その除雪作業急ピッチという報道が新聞紙上を飾ったのは、私が東京に帰ってのちのことだった。バス一台がやっと通れる幅しかない、高さ十五メートルを超える「雪の大谷」、私にいわせれば、蒼氷から新雪へと幾重にも積み重ねられた階調すぐれて美しい「雪の衝立回廊」が観光客の歓声を待っている。

そうして、室堂平からはもう指呼の間に仰げる雄山頂上には雄山神社の峰の本社奥宮。教導する側の理念とは別に、庶民をして渴仰させるに充分な崇高な世界がそこにある。

午後の日差しの中で

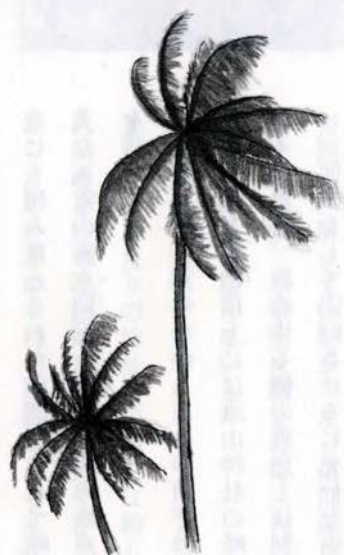
〈第五回〉

神の使い

吉川英明

近頃やたらに陰惨なニュースが多い。

大阪で、愛犬五人が次々に殺されて埋められていたかと思うと、東京でフィルム会社の重役が、自宅の玄関先で刺し殺される。その衝撃も醒めやらぬうち、福岡では三十八歳の美容師が殺され、ばらばらに切り刻まれて捨てられる



という、酸鼻を極める事件が相次いだ。

こう見てくると、やはり、人間というのは、この地球という星に生きる生物のうちで、最も残酷な動物だと思わざるを得ない。

他の動物と違って、自分の命のためではなく、憎しみ、怒り、怨み、欲などというものを引き

金にして、あつけなく同類を殺す。

そういう人間の醜さは、誰もが先刻承知の筈なのだが、このところの新聞やテレビを見てみると、

(それにしても……)

と、溜め息の出るほど酷い事件が目についてしまふのだ。

そんな中で、二月の初めに、グアム島沖で沈没した沖縄のまぐろはえ縄漁船「第一保栄丸」の船長以下乗組員九人が、小さな救命ボートで三十七日間も漂流した末助かったというニュースは、明るい話題という以上に、人間の生命力の強靱さを見せつけられた思いがして感動的だった。

遭難してから一月余りも、ボートの上で生きていたという事実自体驚くべきことなのだが、

それにも増して、その後の特派員電として朝日新聞に載ったフィリピン人の乗組員の話が、私には衝撃だった。

彼らは、二月の九日に船が沈没して漂流を始めたが、持っていたビスケットも五日後の十四日には食べつくして食料がなくなった。

そんな中で一度だけ、救命ボートにとまったアホウドリを捕まえ、皆で食べたという。

ここまでは、読んでいて、なるほどと思うのだが、この後が凄いのだ。

アホウドリは、その後もよく救命ボートに降り立ったが、二十四歳のコックは、

「神様のバチが当たるような気がして、食べられなかった」

と言っている。

そして更に、三月初め、今度は海亀が近づい

午後の日差しの中で

て来たので捕まえたが、結局食べずに放してやっている。

その海亀は、再びボートに近づいて来て、九人は今度こそ食べようと捕まえるのだが、船長が、「やっぱり、放してやろう」

と言って海に戻した。九人は、あの海亀は神の使者だと思っている……というのだ。

私は、この記事を読んだ後、しばし呆然としてしまった。そんなことがあるのだろうかと思っただのである。

九人の男が、足も伸ばせないほど狭い救命ボートに詰め込まれ、水も食料もない絶望的な漂流を続けている。そうした極限状態の中で、鳥や亀に憐れみをかけて殺生しない……そんなことが、本当にあるのだろうか？

記事によれば、日本人の船長を除く八人のフイリピン人は全員カトリック教徒で、漂流中も朝、昼、晩と祈りを欠かさなかったという。キリスト教という宗教が、彼らの心をこれほど崇高なものにまで高めたのだろうか。

私と同じ立場にいたら、寄ってくるアホウドリも海亀も皆殺し、飢えをしのいでいただろうと思うにつけ、彼らの行為には、賞讃とか讃嘆とかいう言葉では表わせない畏敬の念を覚えたのだった。

だから、その二日後に同じ朝日新聞に載った続報の見出しはショックだった。

その見出しというのは、

「日本人船長殺し食べる相談……比乗組員二人が証言」

というものである。

これは、共同通信の記事なのだが、乗組員八人のうち三十一歳の船員ら二人が、マニラのラジオ局のインタビュウに答えて語ったというのだ。

それによると、フィリピン人たちは、誰かが死んだら、その遺体の肉を残った者が食べるということで合意していた。しかし、誰かが餓死する前に船長が生きていたら、まず船長を殺して食べようという合意も出来ていたというのである。

私は、これを読んで、人間の本性の凄まじさに慄然すると同時に、一方で、さもあらんと思ひ、心の底でほっとした。

この場合、ほっとしたという誤解を招くかもしれないが、鳥や亀の命を取らずに死を待つ

というよりも、異人種の船長を殺してでも飢えをしのぐという心理の方がわかる気がするのだ。

実際にその場になったら、私には、その勇氣はないだろう。

しかし、手近にある食べ物（鳥や亀は平時においてさえ人間の食べ物だ）に手を出さずに死を待つということは、私の理解を遥かに越える。それにしても、鳥や亀も殺せなかつた男達が、船長殺しを画策する……この両極端の証言の裏には何かあるのだろう。

私は、興味をそそられて、手に入るだけの新聞記事や雑誌を集めて読んでみた。

そうすると（直接取材するわけではないので、もどかしいのだが）各人の微妙な思い違いや、極限状況の心理の危うさを示唆する発言が浮か

んでくる。

まず、最初に紹介した朝日の特派員電では、最年少の乗組員が、

「船長は、残り少ないビスケットを八人で分けなさいと言ってくれたこともある。今では父親だと思っています」

と言っているのに対して、後から出た写真週刊誌「フォーカス」のインタビューの中で、本村船長は、

「ビスケットと水は、最初に全員に均等に分けちゃったんです。私が食べ物管理していると、襲われかねませんでしたからね」

と言っている。実際、眠っている間に、自分の分まで食べられた上、飲料水まで飲まれてしまったというのだ。

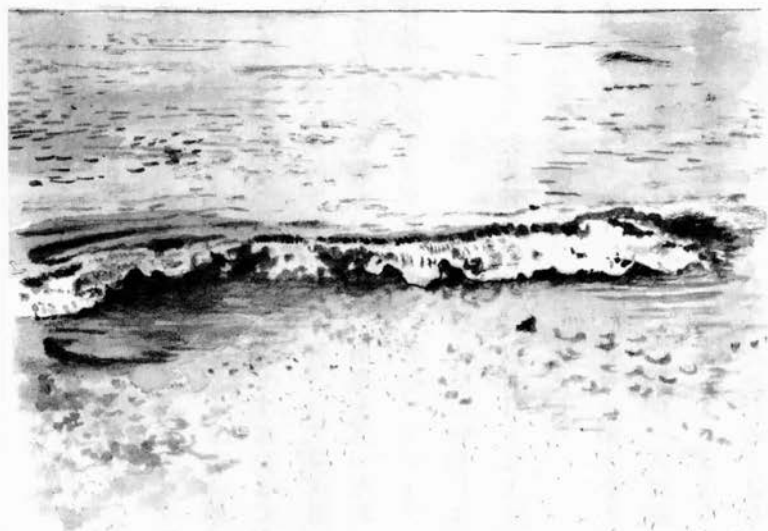
本村船長は更に「週刊文春」のインタビューで、フィリピン人は八年前から雇うようになって習性はわかっていたから、ビスケットの件は黙っていたが、水まで飲まれたのにはさすがに腹が立った、と述懐している。

つまり、船長の方では、初めからフィリピン乗組員に対して、不信感を持っているのだ。それも、八人のうち特定の乗組員に対して、強い不信感を抱いていたということが、

「八人のうち、誰が水を飲んでしまったのか、わかっていますよ」

という言葉から窺える。

人は、言葉が通じなくても、相手が自分をどう思っているかということは敏感に察知するものだ。一部の乗組員を船長が強く忌避し、彼ら



が船長を憎んでいるという図式が見えてくる。

極限状況にある八人の男のうちの、ある者は船長を父親とまで慕い、ある者は殺して食おうと思う……そう見てくると、これ、両方とも人間なのだなと思えてくる。フィリピン人同志で、何度か激しい口論もあったという記事もあるが、船長の処分を巡っての口論ではなかったかという見方も出来る。本村船長は彼らの話すタガログ語が理解出来ない。

しかし、船長を殺して食おうと思った男達でも、海亀を逃がすのに同意したのは事実なのだ。その時の状況は、「週刊文春」のインタビュ어가生々しい。本村船長はこう証言している。

「……乗組員の一人が、その海亀を抱き上げて救命ボートの真ん中に置きました。この時期に

なるとみんな、何でもいいから口の中へ入れた
い思いで一杯です。フィリピン人は、海亀をひ
っくり返しました。しかし私たち九人は、海亀
の腹をじっと眺めながら約十分間、誰も一言も
発せずにいました。そしてなぜか、海亀を放し
てやったのです。（中略）私も乗組員も、あの
海亀を食べなかったから助かったのだと、本気
で思っています」

この時期には、皆体力も弱り、船長自身、頭
がぼーっとして考える気力がなくなってきたとい
たという。

死と隣り合わせの朦朧とした意識の中で、そ
の瞬間、人は神に近づき、船長を憎んでいた男
でさえ、罪もない海亀に手を下すことが出来な
かったのではないか……そう思う以外、私には

解釈のしようがない。

反面、三月十九日の産経新聞の時事通信電には、これとはまったく逆の心理体験の証言が載っている。

二十四歳の乗組員とあるから、朝日の特電のコックと同一人物かもしれないが、こう言っている。

「漂流二週間目ごろ、仲間が食料に見えた。邪念を払い、神に祈った。鳥を捕まえ羽をむしり、皆で生のまま食べた。皆腹が減っていたので骨まで食べた。流木の木片も食べた」

この証言からは、凄まじい飢餓状態が窺える。木片まで食べた上、仲間に飛びかかりそうな精神の錯乱から逃れようと神に祈っている。人間の心の内が、神と悪魔の間を揺れ動いている様子が推測出来る。

酷な想像だが、もしもう一週間か十日、救出が遅れていたらどうなっていたろうか。

一部の乗組員が船長殺しを実行に移し、船長を父親とも思っていた乗組員までが、その肉で飢えをしのいだかもしれない。そして、一度人肉を味わった彼らは、疑心暗鬼も手伝って仲間同志の殺し合いを始めるということもあり得たろう。

そうなったら、まさに地獄草紙そのものだ。彼らは、餓鬼道に落ちるぎりぎりの所で救われたのではなからうか。

のうのと机の上で、極限を生き延びた彼らの心理を忖度するのは不遜に過ぎるかもしれない。だが、そう考えると、あの海亀は、本当に神の使いだったのかもしれないと、私にも思えてくる。

(作家)

わたしの校歌物語

利根川 裕

この四月から、新潟経営大学という新設の四年制大学の教授となり、毎週、東京から通うこととなった。

数年前から、この大学設立準備にいささか関わってきたのだが、ひとつの大学

を新設するのは、なんと大変なことだろうと、骨身に徹して知ったことであった。

やっと開学にこぎつけたのだが、いよいよ開校となると、やはり学歌（校歌）が必要だろうということになり、まわりまわ

って、けっきょくはわたしが作詞することになった。あまり豊かでもない詩才をしぼり出して、ようやく出来あがったのは、期限ぎりぎりの三月はじめてであった。

この新設大学とわたしとの縁についてはあとで触れるとして、まず、その校歌の話であるが、じつは十数年前に一度、校歌を作詞したことがある。

わたしの育ったふるさととは、新潟県糸魚川市だが、そこに新しい小学校が設立され、その小学校校歌を作詞したのである。

ところで、わたしの育った糸魚川の家屋敷は、少々世間的成功者であったわたしの祖父が作りあげたものだったが、その後、三代目にあたるわたしがすべて売

り払ってしまったのである。

東京在住ときめたわたしとしては、これはこれでやむをえない現実的処理だったのだが、それでもわたしの心の奥のどこかで、家屋敷を売り払って故郷を捨ててしまったという、なにがしかの負い目のようなものがないわけではなかった。

ところが、新設の小学校は、まさに、わたしの売り払った家屋敷のすぐ近くに建てられたのである。だから、その校歌を作れとの委嘱を受けたとき、わたしは、これでわたしの負い目のいくぶんかが癒されるような気がして、よろこんでお受けした次第であった。

さてしかし、いざ作りだしてみたら、十重二十重の自縛自縛にがんじがらめに

なって、容易に筆が進まなかった。

というのは、こんな事情があったからである。

わが糸魚川には、文学者相馬御風が住んでいた。明治末期から大正初期にかけて、島村抱月の直系中の直系の弟子として、雑誌「早稲田文学」に拠って自然主義文学運動で名をはせた相馬御風である。

そしてやがて、三十数歳の若さで故郷糸魚川に帰って、のちには良寛研究でよく知られたあの相馬御風である。その相馬御風の名は、世間一般では早稲田大学校歌 作詞家としても知られている。

昭和四十三年に『朝日新聞』が「東京のうた」という連載を企画し、それがのちに一冊の単行本にまとめられたが、そ

の中に「早稲田大学校歌」という項があり、そこにつぎのような一節がある。

——明治四十年、創立二十五年式典。

学校当局は、学生から校歌を募集。謝礼三十五円。しかし、佳作なく、坪内逍遙と島村抱月は、卒業したての相馬御風に作詞を依頼した。十日のち、坪内の朱筆をもって完成したのが「都の西北」である。作曲、東儀鉄笛は、宮中の雅楽師の家出身。式典の十月二十日は、「朝来秋空廓落と金気人に爽かに早稲田、戸塚付近の秋色掬すべき」（東京日日）日であった。大隈邸での園遊会のあと、教職員、学生、校友の大合唱に御風は感激のあまり泣き出したと伝わる——

そういう相馬御風である。この御風が

わがふるさとの糸魚川へもどってくるのが大正二年。以後、御風は生涯を閉じる昭和二十五年まで、糸魚川に住みつづけた。

郷里にもどつてからの御風は、「都の西北」の作詞者という栄光もあつて、求めに応じてかなりの数の校歌を作っている。ある人の調べによると、二百六十数歌ある。わたしの通つた糸魚川小学校も糸魚川中学校もその校歌は、御風作詞であつた。わたしが小学校三年か四年生のとき、この糸魚川で町制何十周年かの行事があつて、そのときわが小学校でも堂々たる講堂が出来たのだが、その記念に相馬御風を招いての大学芸会があつた。わたしが、御風その人を見たのはこれが

はじめであつた。会が終るとき、われら全校児童はたちあがつて、作詞者御風の前で校歌を斉唱した。式のたびに歌っている校歌であるが、当の作詞者がそこにいる、ということ、いつもとは違つた気持ちのこもつた斉唱であつた。

御風は一段高くしつらえた席に腰かけていたが、斉唱が次第に高まつてゆくに、つれ、懷ろからハンカチを取り出し、顔を拭つた。「先生、泣いているな」と、わたしは思った。そして、歌っているわたしにも涙がこみあげてきていた。

それから数年たつて、わたしが糸魚川中学校を卒業するとき、ある伝手^{つて}があつて、わたしは御風宅に御風先生をお訪ねすることになった。やがてわたしは、郷

里糸魚川を離れた学生生活を送ることに
なるのだが、あるとき、何かの休みで糸魚
川へ帰って御風先生をお訪ねしたら、珍
しいことにラジオを聞いていらした。

六大学野球の早慶戦の中継であった。試
合が終った。そして、「都の西北」の大
合唱がはじまった。御風先生は、それを
聞きたかったのである。

東京の神宮球場からはるかに離れた新
潟県糸魚川の一隅で、もう六十歳をも越
えた御風は、若き日に自分の作った「都
の西北」の大合唱に耳を傾け、やはりこ
のときも泣いた。

さきに引用した『朝日新聞』の記事は、
御風死後十八年もたってからのものでは
あるが、わたしは「御風は感激のあまり泣

き出した」というての記事を読んだとき、
ただちにラジオの前の御風先生を思いお
こした。またさらに、糸魚川小学校の校歌
で泣いた先生の顔を思いおこしていた。
御風と校歌。御風先生を通して、わた
しには校歌というものに対する特別な思
いがある。

だから、いざわたしが校歌を作るとな
ると、動きがつかなくなるのである。と
ともに、たいへん不遜にも、なんとして
でも校歌を作りたいとも思うのである。

話がはじめに戻る。

わたしが旧制新潟高校の文科生だった
のは、戦争末期。そして昭和二十年に、わ
れら高校生は勤労動員にかりだされて、
越後平野の中にある小高い丘陵地で、穴

を掘っていた。当時、新潟市にあった陸軍被服廠が、空襲に備えて山中に疎開し、そこに地下工場を作る計画があったからである。大きな穴を二十いくつも掘るといふ青写真であった。そしてわれら高校生は、割りあてられて出てきた近在の婦人たちとともに、とにかく穴を掘っていた。もう負けいくさは誰の目にも明らかだった。そして、穴が完成しないうちに、戦いが終わった。

学校から離れ、お寺に合宿しながら、松の木を倒し、赤土を掘っていた終戦末期のわが青春。

ところで、わたしの出身である新潟県に新設の大学が出来るということで、熱心なお誘いを受けて、その大学予定地を

訪ねてみたら、なんとそこは、かつてわたしが穴を掘っていたそこと地続きの丘陵だったのである。

あれから、ほぼ五十年。かつてわたしが知っていたとおなじ松林があり、かつてわたしが知っていたとおなじ赤土があった。

五十年前、わたしがもつとも希望のない青春の数カ月を送ったまさにそこに、いま新しい大学が建てられようとしている。わたしはそこに、見えない手のようなものを感じとっていた。わたしは、この教授も引きうける気になった。

そして、そういう思いにうながされて、新潟経営大学学歌を作詞したのである。

(作家)

現代の快僧その四

臨済宗妙心寺派 龍源寺住職

松原哲明さん

シルクロードに魅せられて

取材文 稲葉小太郎



仏教とは生き方だ。最近つくづくそう思う。

確かに哲学・思想としての仏教は他に代えるものがない素晴らしいものだけれど、思想を体現する具体的な見本がなければ、それも単なる空論になってしまう。見本とは、いうまでもなく仏教者の生き方である。

〇〇宗の始祖がどんなにすごい人物でも、教えがどんなに深いものでも、今生きている僧侶たちの生きざまにそれが反映していなかったら価値は半減してしまう。今を生きているひとり

まつばら・てつみよ●一九二九（昭和十四）年東京都生まれ。早稲田大学文学部国文科卒。ブリジストン宣伝部勤務を経て、三島市の龍沢寺で禅修行をつむ。「禅の会」主幹、「南無の会」副総務。著書に『草木のごとく生きる』（PHP出版刊）「心は導くフツダのあとをつき」（佼成出版刊）ほか多数。

の人間として、僧侶がなにを考えているか。なにをしているか。それによって仏教の価値が問われている。

今回の松原哲明さんの生きざまに、読者はなにを感じてくれるだろうか。

松原哲明さんといえ、その活躍ぶりを知らないひとのほうが少ないだろう。

臨濟宗妙心寺派の布教師として超有名な松原泰道さんの長男として生まれ、現在は父を継いで東京三田の龍源寺住職をつとめる。渋谷の吸江寺・八王子の福善寺の住職も兼務し、龍源寺では毎月一回一般の坐禅希望者を集める「禅の会」を主宰、「南無の会」副総務もこなす。そのかたわら企業の社員研修など年間三百回もの講演に飛び回る。これまで書いた本が六十七冊、共著（対談集・編者を含む）が三十三冊。法話を収録したカセットやビデオ多数、作詞もこなしてしまふ。

このように書いていくといかにも才知に長けた、バリバリの「やり手」のお坊さんを想像してしまう。しかし、実際にお会いした松原哲明さんは驚くほど繊細そうな、やさしげなひとだった。

繊細といえば、松原さんは小さいころからからだが弱かったらしい。

「頭のてっぺんから足まで、まともなところはないですね」

そもその始まりはまだ小学校に上がる前。庭で遊んでいて足を踏み外し、尖った石の上に頭から墜落、頭から血を吹き出し病院へ担ぎ込まれた。心臓は発作性頻拍症で入院、学生時代の最後には腎臓結石で四ヶ月入院、肝臓はウイルス性の肝炎でやられ、右足には骨折の後を固定した針金がいまだに入っている。血圧も高く、血圧を下げる薬は必需品だ。

「汚い話ですが、痔もひどいんです。つい一週間前もお尻をばっさり切られましてね、でもそのあとすぐ講演を二本しましたが」

ほとんどいつも、どこか悪いところを抱えているという。そういえば、この取材のときも盛んに鼻をすすっておられた。

逆に考えれば、これだけからだの弱いひとが、どうして全国を飛び回り年間三百回の講演をこ

なすことができるのか。その秘密はなんだろう。

自分の限界を試す旅

その前に、松原さんがここ数十年にわたって挑戦しているシルクロードの旅についてふれておきたい。松原さんが西域への旅を最初に思い立ったのは、お察しのとおり『西遊記』の影響だ。「どうせお坊さんになるんだから、なにかやってみて終わりたいなあ、というのがあったんです。でも、自分ではなんにもできないから、せめて三蔵法師の真似をしてみよう」と

玄奘三蔵はお経を求めてはるばるインドまで行き、釈尊の足跡をたどっている。ならば三蔵の歩いたあとを追っかければ、同時に釈尊の歩みもたどることができる。仏教史の勉強にもなる。学者を同行すれば、彼らの研究の手伝いもできるだろう。そんな一石四鳥のアイデアだった。その旅に、松原哲明独自のものを付け加える

ことができないか。玄奘三蔵の記した『大唐西域記』はきわめて実用的な地理歴史の書である。そこには人間に関する記述が欠けている。ならば自分は、旅をとおして人間について考えてみよう。『大唐西域記・人生論』をやってみよう、と思った。

一九七九年に最初に西域に出かけてから十年以上、渡航回数はいまや三十回を数える。中国からインド、パキスタン、ネパール、カザフスタンと一万キロメートルを走破した。ジープでの旅とはいえ、常に危険が伴う。四十度を越える砂漠のなかを、五分ごとに水を飲みながら進んだこともある。

この旅はからだの弱い松原さんにとって、自分の体力の限界を試す旅であった。同時にこころの強さを試す旅でもあった。旅にはトラブルがつきものだ。空腹でやっとホテルにたどり着いたら部屋がとってなかったり、約束の相手に



自坊での坐禅会。参加者は多い。

会えなかったり。そこで怒るのは簡単だが、ぐつとこらえて次の方法を考える。その過程で自分の内面が磨かれていく。

「旅とは、自分を知るための座標軸かもしれない」

ではその座標には、どのような図形が描かれてきたのだろう。

お坊さんだって社会人

松原哲明さんは一九三九年（昭和十四）年東京都港区三田で生まれた。千代田区の九段高校を卒業し、早稲田大学文学部国文科に入学。卒業後はブリジストン株式会社に勤務する。由緒あるお寺に生まれたにもかかわらず、そのまま僧籍に入ることせず、社会に出てしまったわけだ。

これには、やはり病気の体験が大きい。大学四年生のとき、腎臓結石ができて入院、約四カ

月の間ベッドに寝ていたのだ。そのとき自分の人生について、じっくり考えさせられた。

「おぎやーと生まれて人生の幕が開いて、死ぬときに幕が閉じる、そう考えると、人生の舞台にもちゃんとした脚本が必要だよなあ」

脚本を内容豊かなものにするためには、単調なストーリーではだめ。人生の喜怒哀楽、さまざまな局面を取り入れて、深い味わいのあるものにしなければ面白くない。仏教者としても、仏教だけを勉強しては、起伏のない人生になってしまう。実際の社会生活を経験し、文学、歴史、旅などを通じて、バラエティを与える必要がある。それは逆に、仏教そのものに対する理解を深めることにもつながるだろう。

松原さんは文学部国文科の出身。当初はマスコミ関係への就職を希望していたところ、たまに寺に出入りしていた当時のブリジストンの社長が、

「それならうちの宣伝部が空いているから、来ればいい」

話はすぐに決まった。ブリジストンでは販売促進部宣伝課に配属されて四、五冊の業界雑誌の編集を任された。最初はひとの文章を編集し、紙面を構成する作業である。文章に手を加えながら、この程度のものでなくすぐにでも書けると密かに思っていた。ところがいざ実際に書いてみると、その自信は粉々になる。

書けない。ごく簡単なルポが思うように書けないのだ。さんざん頭を抱えて最初の原稿を書き上げ、編集長に提出したのに、もどってきた原稿は赤鉛筆の直して真っ赤っか。

頭に來たの、なんの。

「失礼な。オレは早稲田の国文科だぞ。オレの文章のどこが悪い」

そんな言葉がのどから出かかった。しかしその後編集長は、ほとんど見もしないで屑籠へ



哲明さんと父・泰道さんの著書が玄関にズラリと並ぶ。

ボン。手を入れれば真っ赤に直す。

そんなことが半年ほど続いたのだろうか。ある日、あれほどひとの原稿を真っ赤にした編集長が、「てにをは」ひとつ直さずにオーケーのハシコを押した。これ以上教えることはない、と認められたのだ。おかしい話だが、そうなる

今度は怖くなる。

「ま、待ってください。頼むから、ちよつといいから、手を入れてください」

「いいんだよ。次は？」

もう、原稿を見ることもしない。

「ああ、このひとはほんとうのプロなんだ」

松原さんは思ったという。

ブリジストン宣伝部には結局三年間在籍し、最後には十冊もの雑誌を担当していた。しかし、あれほど夢見た編集の仕事なのに、ある事件をきっかけに、あっさりと捨ててしまうことになる。

お前みたいなのが必要なんだ

入社して三年、同期の仲間はそろそろ転勤するものも出てきたころ。当時の鎌倉円覚寺管長である朝比奈宗源老師が社員研修のための講演を行なったとき、朝比奈先生をインタビューし



月一回の「禅の会」は毎月第一土曜日。

て社内報に記事を書いてほしいといわれた。社内報は宣伝部の仕事ではない。いったんは断ったが、寺の出身はお前しかいないからという強い要望で引き受けた。しかし、気の進まないまま部屋へ行ったから、つつい生意気な言葉が口を付いて出た。

「先生、さっきの話はよくわからなかった。聞いているのは信者じゃないのに、なんで仏教用語ばかり使うのか」

朝比奈宗源老師といえば、当時の宗教界の頂

点にいた人物。それを知らない松原さんじゃないのに、よくぞいったもの。案の定……朝比奈老師の怒ること！

「ワシはお前なんぞと宗教論争をしに来たんじやない。帰る」

席を立った老師を部長と課長があわてて追いかける。エレベーターに乗る寸前に老師をつかまえて、部長が頭を下げた。

「先生、大変失礼なことをしました。実はこの男も、寺の出身なんです」

「なに、お前は仏飯を食べる身じゃないか、それがあんな失礼なことを言ったのか。名を名乗れ」

「……松原です」

「どこに住んでいるんだ」

「……東京三田の龍源寺というところにいます」

「あそこには松原泰道という男がいて、ワシらの仲間だ」

「ぼくは……その息子です」

親友の息子とくれば、そこで許してしまうか、あるいはかさにかかって叱るか。しかし、朝比奈老師はそのどちらでもなかった。

「今の宗教界にはお前みたいな若いやつがいなくて困っておる。早く修行を終えて、ワシやオヤジの手伝いをするんじゃ」

まさに一喝。ばつさりと切られたかつこうで、そのまま出家を決めてしまった。

「お前みたいな若い者が要だ、そういわれてのぼせ上がって飛び込んだんです」

松原さんは当時を思い出す。

正面を向く

修行場所を選んだのは静岡県三島市の龍沢寺。

白隠禪師による開山の由緒ある寺だ。師匠は中川宗淵老師という。ところが、修行を始めた当初は一日として楽しいときはなかった。

とにかくからだが弱かったので、毎日の生活がつかうてしょうがない。朝の三時に起床して夜は九時まで坐禅。ときには一週間寝ずに座ることだってある。日曜日は石や土を運んだり、田んぼを耕したり。とにかく初めてのことばかり。二十五歳のこのときまで酒、煙草、マージャンの生活をしていたのが、いきなり聖僧の生活というのも無理がある。

「今日、やめようか、明日、逃げだそうか」

そう思う毎日だった。励まし合う友だちがいなかったら、とつくにやめていたかもしれない。

今思い出しても、当時の自分のアタマのなかは支離滅裂だった。外側は僧を装っているけれど、内側では乱を繰り返す。自分の内面との戦いだった。

坐禅とは無に参ずることという。ひたすら「む……む……」と考えているわけだ。しかし大の男が「む」なんてやっているのには限界があ

る。それよりはもつと早く時間が過ぎる方法を考える。たとえば小学校のころの思い出。どんなことをして遊んだか、なにが面白かったか思い出す。それがすんだら中学校、高校と順番に思い出していく。さらにはこの道場を出たらなにをするか、夢想する。ひととおりの終わったら、また小学校に戻って最初からやりなおす。

最初のうちはたしかに楽しい。しかし不思議なことに、新しい脚本というのは出来ないもの。気がつくと、何回も何十回も、いや何百回も堂堂巡りをしている。思い出す内容も一緒なら順序も同じ。六ヶ月も続けていると、いくらなんでもいやになってくる。それからさらに半年ほどたったころ、もう過去を思い出すことさえできない状態になっていた。テレビでいえば、その日の番組がすべて終わって、画面がザーと流れている状態だろうか。

「しょうがない。じゃあ、こんどはいわれたこ

とをやろうか」

そう思った瞬間、自分が今まで横を向いていたのが、ぐいっと正面を向いたのがわかった。それが師匠の宗淵老師にも伝わったのだろう。

「ずいぶん長かったねえ、あなたは」

老師がいった。これで修行の方向が定まったのだ。それからは老師と問答しても楽しくてしようがない。

「力がついたね」

そういわれて、ものすごくうれしかった。しかしそれからしばらくして、宗淵老師は病に倒れてしまう。それを機会に昭和四十一年、龍沢寺から三田へ戻ってくることになる。

命を使え。死んだ子がいった

臨済宗では、見証という言葉を使う。仏教修行においてあなたは一定の段階に達しましたよ、と師匠から弟子に与えられる証明のようなもの

だ。それはそれでたいへんな価値のあるものだが、松原さんの活動はそれとは別の次元の問題のようだ。

「見証というのはしたことないし、悟ったと思



龍源寺の例会の案内板。

ったこともありません。ただね、自分のなかで大声でうーんと納得できた発見というのがあるんです。それは、子どもが死んだときのことです」

松原さんに最初の子どもが生まれたのは今から二十四年前。体重は二千八百グラムと少なめだったけど、大きな声で泣く元気な赤ちゃんだった。まわりから祝福されて、有頂天だった。

ところが四日目、病院から電話がかかってきた。

「お気の毒ですが、赤ちゃんが亡くなりました」
亡くなりましたといったって、そんなこと信じられるわけがない。家になきながら帰ってきても実感がわかない。火葬場から骨だけになって戻った子どもを見て、

「お前、これじゃあまるで、死ぬために生まれてきたみたいじゃないか」

とつぶやいた。そのときどこから返事がかえってきた。

「じゃあ、お父さんはなにに生まれてきたの？」

えっと思った。おれはなにをするために生まれてきたんだって？ メシを食うためでもないし、きれいな衣を着るためでもない。立派な家に住むためでもない。

オレの生まれた目的は、持って生まれたものを使うためじゃないのか。それは「イノチ」しかない。「イノチ」を使うために、生まれてきたんじゃないか。命を使うから、使命というんじゃないか。

確かに自分は妻帯しているし、肉を食べば酒も飲む。煩惱のとりこかもしれない。でも、それが人間というものじゃないか。そういう人間のなかで命を使って一緒に悩むお坊さんが必要なんじゃないか。

「そんなのは僧侶じゃないというのなら、別の名前でもかまわないんです」

大学最後の年に四カ月も入院生活を送り、僧侶も社会を知らなければいけないと気づいたこ

と。禅修行の間からだの弱いのを仲間を支えてもらったこと。そしてわが子の死の体験。松原さんの人生の節目にはかならず病と死が関係している。

ぼくはこの文章の最初に、こんなにかのだの弱いひとがなぜこんなに活躍できるのか、と質問した。それは問いの立て方がそもそも違っていたようだ。松原さんは、からだが弱かったからこそ、死と隣り合わせだったからこそ、自分の使命を果たすために全力を注いできたのだろう。

シルクロードの旅もほぼ終わりに近づいている。松原さんの次の目標はなんだろう。

「自分でわかるんだけど、もうあんまり長生きはできないと思うんです。だから執筆のほうへ集中したい気持ちがあります。今まで六十八冊の本を書かせてもらって、自分で納得したのはひとつもないんです。もっと徹底的に集中して、二ヶ月に一冊くらいのペースで書いていきたい

です」

たとえば夢の話をもとに、仏教童話のようなものを書いてみたいという。

「でもそんなこといいながら、仏教界全体のレベルアップのために後継者を育てていきたいし、軽井沢の道場ももっと充実させて、人間教育をやってみたいなあ」

もちろんシルクロードの旅も残っている。九月には、中国の楼蘭へ行き、般若心経をあげるつもりだ。滅亡して千五百年ぶりに楼蘭にお経が響くことになる。

松原さんの多忙なときは、まだまだ続くそう

父と子

最後に、誰もが知りたいと思う父、松原泰道さんのことを聞いてみよう。ベストセラー『般若心経入門』（祥伝社）を書いた泰道さんは、押しも

押されぬ現代の高僧。八十八歳の高齢にもかかわらず、東京名古屋を日帰りして往復したり、一日二つや三つの講演はざらだという。そんな父を持って、プレッシャーなどはないのだろうか。

「高僧とか名僧というのじゃなくて、自宅ではふつうの父ですよ。プレッシャーなんてもちろんないです。親子というのはね、ライバルにはならないんです。敵対関係ではなくて同胞なんです。うれしいことがあったら一緒に喜び、困っているときには助けてあげる。それが家族でしょう」

松原家では、今でも食卓はひとつ。一九〇七年生まれの泰道さんと一九七〇年代生まれの孫たちが同じ食卓に付く。こんな光景、現代の日本ではなかなか見られなくなっていると思う。

いなか・こたろう●一九六一年生まれ。東京大学文学部印度哲学印度文学専修過程卒。最近パソコン通信を始め、仏教フォーラムでも執筆中。

連載

第3回

念仏信仰と武士道

盛岡大学学長 高橋富雄



イラストレーション 小菅 遼

それから先は奇瑞譚になるのです。

そのときに、紫の雲が叡山の空に立ちなびき、周りには異香薫じたとあるのでございます。

京都にいる人たちも叡山の山の上に紫の雲がたなびくを見ました。そのことを法然様にお伝えしますと、法然は「それこそ甘糟が往生を遂げたしるしである」と言つて、しばらく瞑目していたというふうに書かれているのでございます。

私は、こここのところに、ぎりぎりの段階での、すなわち限界状況での武士道と、同じくぎりぎりのところで問われている念仏往生の心との出会いを見るのです。どんな人でも、甘糟のような疑問は必ず持つはずです。武士として立派な働きをする。それはどうしても仏の道にそむく

道にならざるを得ない。そういう疑問は必ずおこるはずです。そうでなかったら、うそだと思ひます。しかし、反対に、今度は武士であることに徹した人たちが人を殺し、傷つけておきなから、それが初めから終わりまで立派づくめであると考えたとすれば、これにもどこかにごまかしがあるでしょう。自分を偽っているのです。

この二つのものは、矛盾として、どこかで戦わなければいけないものです。この矛盾の戦いは、こちらを引つ込めて、そちらを立てるといふふうな形では解決することができないものでございます。生と死の間ではごまかしはあり得ないのでございます。法然様の教えは、それを見ごとに乗り越えているのです。よいことをや

っている人は、そのよいことに即して念仏を唱えて往生する。悪いことしかできない人は、その悪いことの真実に徹して念仏往生を遂げるのである。善悪を越えたところに、念仏はすべての人に開かれる。したがって、だれにも同じような救いが保証されるのです。それがここでの法然様の教えだったのでございます。

善悪を選ばないとか、あるいは学問があるないを問わないとかいうことを、私たちは言葉では言います。でも、実際の生活の中で、それを聞く人にはつきりとした確信に聞き取ってもらえるかどうかは、一にかかって説く人の大きな人格の力にあるのです。その人が仏様に代わって、阿弥陀様に代わって、その大きな慈悲の心を人間に伝えているのだという、その実感を聞

く人が受けとめない限り、それは真実の言葉にはなりません。私はこの言葉は、言葉そのものとしてはかなりの人が言うことのできる言葉だと思っています。ただ、法然という人格をとおして語られた言葉であるために真実になることができた——そういうふうに受けとめて感慨深いのでございます。

そういうすばらしい感動物語を、一章全体にわたって説き明かして、まことに感銘深いのが、熊谷次郎直実蓮生房の物語なのでございます。私は、ある意味においては、『法然上人行状画図』四十八巻にわたる法然上人全祖師伝は、熊谷次郎直実物語の章に集約されると言ってもいいのではないかと考えております。同時にこれは、すばらしい文学にもなる名篇でもあるのでござ

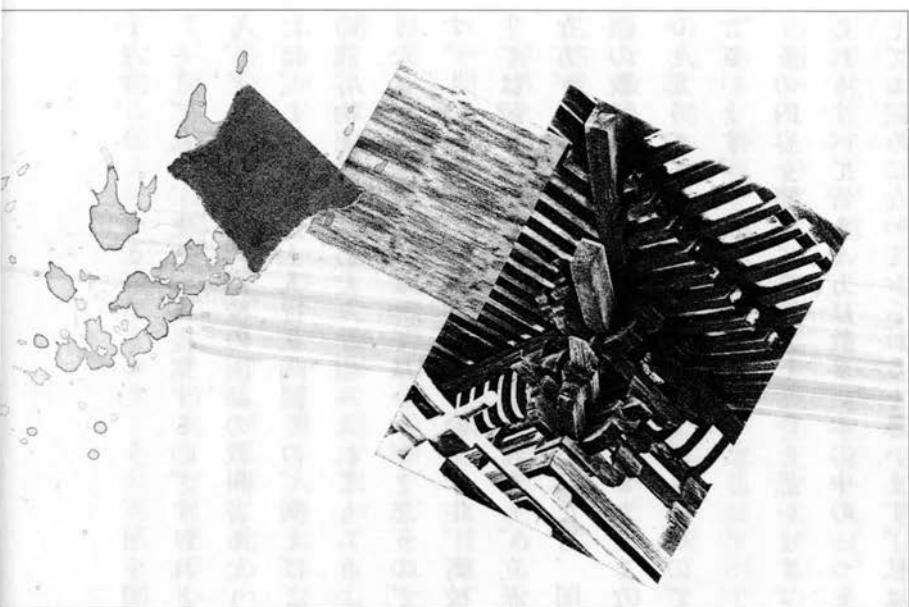
います。

そこで私は、先生方に提案するのですけれども、どこかの中学、高校の国語の教科書あたりには、この『法然上人行状画図』の、例えばこの熊谷物語の一章あたりを組み入れてもらうようなことをお考えになってはいかかと思うのです。このとおりの言葉では、今の中学生、高校生では読み切れないかもしれませんが、立派な方が今の文学になる言葉に直してみたら、国語の教科書あたりに載っても少しもおかしくないと思うのです。そのくらいにすばらしいのでございます。

その内容を簡単にご紹介したいと思います。これもすべて皆さん方は数多い本の中の一つとしてお読みになっておられると思います。私は

この章に焦点を絞って、法然様を読み取ろうとするのでございます。そこがちよつと違うかと思いますが、かなりの先生方にはおさらいみたいになるかと思いますが、私の言葉で復習させていただこうと思うのでございます。

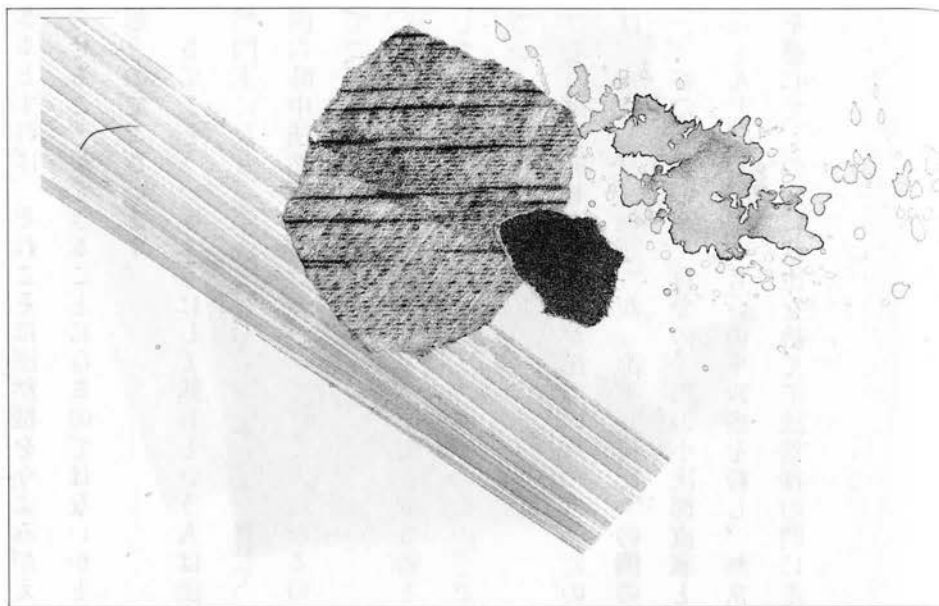
まず、この熊谷物語の最初は、熊谷が初めて法然様をお訪ねして、念仏往生の心をお尋ねしたときの出会いのところから始まるのでございます。熊谷が「私のように罪深い罪人が、念仏往生の志を遂げようとするには、どうすればいいのでしょうか」。型どおりに質問したのでございます。法然様も軽く、「仏様の念仏というのは、そういう罪深い人を救うために設けられているものであるから、いいことをしたとか悪いことをしたとかに関係はない。ただ、念仏を唱



えればそれで救われるのである。そう心得て念仏を唱えるように」。そう簡単に教えてくたさったというのでございます。原文では二行にもならないくらい短い言葉で表現されているのでございます。

法然様のその言葉を聞いて、この大のむくつけき熊谷が、さめざめと泣き出してしまつて、顔を上げようとしなかつたそうでございます。法然様も自分が何か気にさわる悪いことでも言つたのかと不審に思つて、しばらくしてから、「どうしてそんなに泣くのか」と、小声でお尋ねになつたそうでございます。熊谷は涙を抑えて答えました。

「自分のように罪深い者が極楽往生できるとすれば、それは手足をもぐような厳しい刑を受け



るか、あるいは死罪に遭って首を打たれるような斬罪に処せられるか、そのくらいの厳しい刑を受けて、初めて極楽に行くことができるというお話を承るものと覚悟してきました。ところが、今、先生のお話を伺っていると、どんな悪いことをしても、ただ念仏だけ唱えれば往生を遂げられ、別の子細はないとやすやすとおっしゃるものだから、あまりのありがたさに涙が出てしまったのでございます」。

まず、初対面で法然様という方は感動なのでございます。道理も何もわからない人に、たった一言で往生決定の最も深い心を、その罪深い人に実感させることができたのでございます。私たちがもしこれだけの感動を学生に対して、信仰を求める人たちに対して、与えることがで

きるとすれば、それこそは法然様を今よみがえらせることができることになるのではないかと思うのでございます。

さて、そういうふうにして熊谷という人は法然門下になり、蓮生房という名前を与えられて、四六時中法然様のそばについている人になるのでございます。

私はこの物語を読み進んで、歴史をやる者として大変考えさせられることが多かったのでございます。

それは、熊谷という人が信仰の道に入ったのは、大抵『平家物語』か『源平盛衰記』の例の一ノ谷の合戦の後、自分の子供の小次郎直家とほとんど同じ年配ぐらいの平敦盛を殺し、無常を感じて、ついに武士を捨てて法然様の門に走

り、信仰の道に入ったというような話の筋で、熊谷と法然様との出会いを私たちは知らされているのでございます。

歴史家たちはそれだけではなくて、そこには所領争いも絡んでいて、熊谷が幕府の裁決を腹に据え兼ねて、將軍の前でもとどりを切って投げ出して、出家して法然様の門に入った——そうも伝えていきます。こういう形での宗教入りというのは、何となく外から余儀なくされたようなところがあつて、聞く方もスカツとしないところが残る。いずれにしても、熊谷と法然様との出会いは、そんな形で与えられているのでございます。

ところが、『法然上人行状画図』に現れてくる熊谷は、このどちらとも違うのでございます。



そして、私は、こちらのほうがより歴史的だと思っているでございます。あらゆることについてこの『行状画図』のほうが歴史記録としてすぐれているということを申し上げるつもりはないのですけれども、こと信仰に関して語られているところについては、どのような歴史記録や物語に紹介されているものよりも、こちらのほうがより歴史的である、より真実に近いと思うのでございます。すなわち、歴史記録としてもっともつとこれを高く評価することができるといふことでございます。ですからこれを浄土宗における祖師上人の伝記というふうにとどめておくのはもったいないと、私は考えているのでございます。

これから先の熊谷と法然様との長いつき合い

をながめて思うのですが、法然という師のもとで、鎌倉武士熊谷直実は、熊谷であることの何一つ否定することなしに、すなわち、武士熊谷

次郎直実をそのままそっくり生きたままで、信仰の人、蓮生房になっっているのでございます。

『平家物語』などでは、彼は何となく武士であ



ることに矛盾を感じ、その武士であることを否定して、武士熊谷をやめて入道蓮生房になったように伝えているのですけれども、『法然伝』は違うのでございます。これはかえって『法然伝』が正しいのです。物語のほうはかえって法然の教えを浅くしてしまうのです。

なぜでしょうか。

そこには武士をやめなければ信仰の人にならないという考え方が根底にあるのです。そういう考え方は『平家物語』のような文学ならば、それでいいかと思いますが、荒武者熊谷の歴史の信仰を問題にするわれわれまで、これを蓮生房熊谷の真実であるように考えることは、かえって武士熊谷を彫りの浅い人間にしてしまうことになります。そして何よりも、法然様の

信仰を相対的なものにしてしまうことになります。法然様の教えは善悪を選ばないのです。その信仰のために武士であることを何ら否定する必要がないのです。戦いをし、やむを得ず人を殺すならば、人を殺しながらでも念仏を唱えるようにしなさいというのが、武士津戸に教えた法然様の言葉でした。

武士熊谷はそれとおりに生きて蓮生房になったのです。そういう生きざまがまことに生々しい赤裸々な記録として、この『行状画図』はすばらしいのでございます。私は、このほうが熊谷にふさわしく、法然様によりふさわしいと思います。武士道と念仏との出会いもこうだったから、武士に全面的に受け入れられたのだと思っ

（つづく）

アニムズムを生きる



袖山榮眞

去年の春は、常になく数多くのヒガエルが裏庭に現れた。蛙合戦というように、メスを求めて複数のオスどもが組んずほぐれつ、二、三日も過ぎると、割れ鍋に綴じ蓋というか、おのずから幾組かのペアが成立して、それでもなお、あぶれたオスが隙あらばと未練がましく付きまとうというパターンの繰り返しが、自然の摂理

であると思ひ込んでいた。

ところが異変が生じたのである。このシーズンに限りオスはすべて配偶者を得て、一匹のメスがあぶれたのだ。オスどもと違って未練がましく付きまとったりもせず、健気に孤高を守りつつ、ふと漏らす「コクツ、コクツ」という、空間をかこつがときうつろな咽頭音も、そぞ

ろ哀れを誘う。

たまたま酒席で隣り合わせた銀行員のO氏にこの異変を告げると、O邸においては自然の摂理は保たれ、あぶれたオスが犇^ひめいているとのこと。善は急げとばかり、春の嵐を衝いてO邸に立ち寄り、志ん生に「ようすのいい」と評価してもらえそうなオスを一匹、雑巾で引つ掴んで興入れさせた。

嵐の夜が明けると、夥しい量の紐状の卵塊を残して、蛙たちは忽然と姿を消していた。旬日にして蠢動を始めた無数のオタマジャクシの中に、O邸の蛙の遺伝子を担う個体が含まれていた——と信じていた。

虫もころとぬ

O氏は「日本昆虫協会・長野支部」の副会長であり、私はといえば「モラル委員」である。自然保護を錦の御旗に昆虫採集を一方的に「悪」

と断罪する風潮が、子供たちと大自然との交感を隔絶し、かえって自然破壊を加速しかねないとの認識に基づき、「節度ある昆虫採集・観察」を通して「虫と親しみ、虫を知ることにより、そのフィールドである貴重な自然環境を守る一助となる」ことを標榜して、一昨年一月にこの団体が設立されたとき、規約の審議・役員選出などお定まりの議案のほかに、「採集モラルの確立」という八ヶ条の宣言が採択されたのだ。

けれども「語るに落ちる」感のある「研究目的を逸脱して短時日に同一種多数個体の採集をしない」との第四条はまだしも、「節度ある」採集そのものが、言うは易くして行なうに難しい理念であることは、かつての昆虫少年たちの肝に銘じて自覚するところであるにつけ、「モラル委員」を買って出るほど厚顔な会員もないまま空席にされて来たのが、今年の新年総会で本人欠席のまま、袖山榮真に空鉢を回すことにし

た、選任の理由は設立以来二年間の言動から、私が「虫を殺したがいらない人間」であることを、幹部一同が確認したからだ——というのである。

昔の昆虫少年が、家庭を持ち、子供たちが成長してムシに興味を示すようになると、焼け棒杭に火がついたように、かつての採集熱が再発したまま、いつしか初老を迎えて気がついてみると、子供たちはとうの昔に熱が醒めている——というケースが珍らしくないのだが、私の場合、子供が昆虫採集をすると言い出したとき、肺腑の底から突き上げてきた拒絶反応の烈しさは、われながらたじろぎを禁じえないほどであった。本格的な受験態勢に入るべく、やむを得ず昆虫少年たることを放棄した高校二年の冬から、子供が学齢に達するまでの十五年ほどの間に、虫を殺すことに対する私の感性に、一八〇度の方角転換が完了していたことを、突如自覚させられたのである。

情がうつる

一茶のへやれ打つな蠅が手を摺り足をするゝは、ユーモアとか皮肉とかからはほど遠い、慟哭の句なのだ、愛児を喪った一茶の悲しみは、一匹のハエでも殺せなくなるほど痛切なものだったのだ——との松原哲明さんの卓説は、昨日生まれたばかりの玉のような男の子が、今日は変りはてた姿となるという、悪夢のようなご自身の体験のどん底での発見であると承わっているが、そのような啓示に身に覚えもないまま、気がつくとい心の底で「やれ打つな」と力んでいたのだから、何とも不可解である。

そのころ、私は水曜日を狭む三日を東京で、週末週初は長野で生活し、都立大学英文科助教授と、浄土宗十念寺住職の、二足の草鞋を履いていた。問題の過去十五年間の公的な部分は、この二筋道において、いっばしのプロとして世

間さまに通用するように、自分自身をいわば調教することに費されたはずだが、いずれのプロセスにおいても、劇的回心めいた機会に遭遇した記憶のないことは、前記の私的体験の場合と同様である。

こうなったら、仏さまにご託宣を仰ぐほかあるまい。『観無量寿経』に「戒香薫修」という名句があるではないか。常に香に親しむ生活をしていれば、いつしか薫りが身に染みつくように、仏法に触れる機会を重ねること久しくするうち、目に見えぬところで、仏法に則った生活態度への軌道修正が始められてくる。僧侶としての行住坐臥の中で「殺生戒」の教えが、毛穴から浸み入るように、いつしか身について来たのだ——こう考えると、少なくとも自分自身を納得させることができた。

昆虫談義の相の手に私が差し挟んだ、右の如き「お説教」が「日本昆虫協会・長野支部」。

面々にも、ある程度の説得力を発揮したものか、私の存在によって「節度ある採集」というモラルの維持が期待できるとの、結論に到達したらしいが、じつのところ、メンバーのなかには、私の「虫を殺したくない」という心情に、九分九厘まで同調できる人たちが少なくないのである。

蝶の採集にのめり込んでしばらく経つと、必ず幼虫の飼育を手がけるようになる。というのは「華奢」ということばを絵にかいたように繊細な翅を備えたこの昆虫が、自然状態で翅端や鱗粉に何らの欠損もなく捕虫網に収まることなど奇跡に等しいからだ。翔び回っているうちに破損するのだから、羽化直後の個体こそ理想的である。蛹を集めれば良いのだが、特殊な種を除いてそう簡単に見つかるものではない。そこで幼虫を飼うことになるのだが、蜂などの天敵に寄生されている確率が高い。だから、卵か

ら育てる。産気づいていると思われるメスを尾行して、うみたて卵をとって来る。この卵から育てるのだ。

このようにして手塩にかけた幼虫が、無事蛹化し、羽化すると、完全無欠な標本の素材が提供されることになるのだが、これを展翅板にかける時の心のうずきは、誰しも身に覚えのあるところなのだ。飼育の期間中は飼主のわずかな気の弛みによって、常に消滅の危機にさらされる「小さないのち」の存在のために、自分の生活に大幅な規制すら加えて、育み、慈しむのである。モリモリと食卓を平らげる姿を頼もしげに見守り、脱皮がなかなか「難産」のときは、一緒に力んだりしてしまっているのであって、ムシと人間とは「いのち」を持つもの同志として、ほぼ対等の位置を共にしているのだ。羽化したばかりの成虫を手にかけるとき胸がうずくのは当然の理で、本当は殺したくないのだが、完全な標

本が欲しいという煩惱の繫縛を免れることができない——私との違いは、ただそれだけなのだ。

「いのち」に対するこのような感覚を共有すればこそ、男日照りのメスガエル話を耳にしたO氏は、瞬時にして私と同じ憐愍のまなざしを彼女に注ぐことになったのだが、蛙合戦で名高い武州竹ノ塚、六月村の炎天寺でへ瘦蛙負ける一茶是にあり〜と肩入れた俳人は、まぎれもなく斯道の大先達であった。へぬかるみに尻餅つくなでかい蝶〜へ葎からあんな胡蝶の生れけり〜など、蝶の生態についての端倪すべからざる精確な観察を裏打ちする温かいまなざしを、田辺聖子さんは「一茶から見れば人間も雁・雀・蛙・蚊もひとしなみに、地球生物社会のメンバーである」（『信濃』第一五四号）と要約するが、これこそわれらが共有する生命観の要約にほかならない。

死者・小動物・生者

ここで幾何学の方法を援用して「補助線」を引いてみたい。図形の上に一本の直線を引くことによって、その中に秘められていた構造が開顯される驚きは、幾何学の醍醐味の一つであるが、前に述べたような松原哲明説に基づいてへやれ打つな」の句を理解するとき、蠅と人間とを貫く「死者」という補助線が引かれるのである。「死者」の介在によって、他の生物も「地球生物社会のメンバー」であるとの真理を、無意識に納得している事例は数多いが、三人にご登場願うことにする。

一、俳優・中村勘九郎

関容子『役者は勘九郎―中村屋三代』によれば、先代の中村屋、つまり勘三郎は生前の「俺が死んだら蠅になってでも、みんなを見張つてやる」との予告どおり、自らの通夜を手始めに、

テレビ・スタジオ・歌舞伎座の楽居から舞台、ロンドンにはハイドパーク・ホテル、さらに愛妻の通夜には「双蠅」になって舞い戯れたという。ハイドパーク・ホテルでは、看板に泥を塗りかねぬ害虫の出現に殺虫剤を持ち出そうとしたメイドさんに、みんな「ノーノー」とお引き取り願ったとあるが、「ノーノー」とは紛れもない「やれ打つな」の同義語である。

二、批評家・小林秀雄

大学院に入ったが講義のまだ始まらない時期に、『感想』の連載第一回を読んだ時のゾクゾクするような興奮は、今も記憶に新しい。昭和三十八年六月号「新潮」に「つづく」と末記されたまま中断されるまで、足かけ六年、五十六回にわたって展開されたベルグソンを廻る論考は、作者自身の判断によって単行本として陽の目を見ることなく今日に至っている。幸い、いま私が引き合いに出そうとしている「或る童話

的体験」と名付けられた、冒頭のエピソードを含む、連載第一回分だけは、中公文庫『人生について』に収められていることを付記しておきたい。

「終戦の翌年、母が死んだ。母の死は非常に私の心にこたえた」と書き起こされるこのエッセイは、亡くなられてから数日後の「或る童話的体験」の述懐に移行する。「仏に上げる蠟燭を切らしたのに気づき、買いに出掛けた。(中略)もう夕暮であつた。門を出ると行手に螢が一匹飛んでいるのを見た。(中略)今まで見たこともないような大ぶりのもので、見事に光っていた。おっかさんは、今は螢になつている、と私はふと思った」と続けた直後、「実をいえば、私は事実を少しも正確に書いていないのである(中略)正直に書けば、門を出るとおっかさんという螢が飛んでいた、と書くことになる」と訂正される。

話はまだ続くのだが「おっかさんという螢」

という表現のみにこだわることにする。というのは、この訂正によつて死者と小動物と生者との関係——というより(撞着語法めいた表現を敢えてするならば)「死者のいのち」「小動物のいのち」「生者のいのち」の呼応——の基本構造が直視されると同時に、その直視をためらわせる抑止力の潜在もまた、浮彫りにされるからだ。

三、民俗学者・谷川健一

日本古来の生死観を主題とする『青と白の幻想』の巻末に、かれは「落鳥のこと——あとがきにかえて」と題して、小林流に言えば「おっかさんというインコ」についての美しい想い出を語るのだが、そのプロローグで右の「基本構造」に相当するものを「むしろ日本人の常識である」と喝破し、「ただ明治にはじまる日本人の近代思想がそのことに思いをいたさなただけである」と右の「潜在力」の正体を暴いたあと、「しかしながら私たちの日常生活においては、かなり

ずしもそうではない。私事に属することではあるが、ここに一つの挿話を紹介したいと思う」と結ぶのである。

紹介の内容を要約するだけの紙幅もないので原文の味読をお奨めするにとどめるが、「かならずしもそうではない」を、前後の文脈からへ日常生活においては無意識のうちに、この「常識」を受容していることが多い」とパラフレイズすれば、論旨はさらに明確となるのみか、「おっかささんが蛭になったとさえ考えなかった。何も彼も当り前だった」との小林の告白と、見事なまでに符節が合う。

ポスト・モダン

ポスト・ヒューマン

この「常識」を受容して生きる当事者において、死者・小動物・生者の三つは、いわば「大いなるいのち」を共有するものと考えられてい

るが、この「大いなるもの」への畏敬の念こそ、近代思想——特にヒューマニズムが打破すべき対象として立ち向かったものであった。人間が「万物の霊長」を僭称する過程において、他の生物に対する視線は限りなく下方に向かい、現世の幸福を追求・獲得する代償として、死者の尊厳の失墜が始まった。

アニミズム詩人の双壁、まど・みちおと金子みすゞの全詩集を刊行し、ホエール・ウォッチングを成長産業に押し上げた、近年の日本人の情念の根底に、ポスト・モダン・ヒューマンの時代であるとの、健全な時代感覚が察知されるのであって、生物の「いのち」の営みの神秘に驚異の眼を見開き、感嘆の声をあげる瞬間、人間は至高の座を降りて「地球生物社会」の一員たる平衡感覚を回復し、「殺生戒」のルールを体解するのだ。

（浄土宗長野教区長・都立大学名誉教授）



● 昨年の四月号以来、すっかり本誌におなじみとなった利根川裕氏は、この三月末日にテレビ朝日「トゥナイト」のキャスターを降りられました。通算十三年の司会役を只の一夜も休まず、むろん夏休みなどないといさゝかぬ精勤ぶりに、さすがのテレビ局でも驚いていたそうです。今後は作家として新設に専念されると伺っていただけに、新聞の新潟経営大学の副学長ご就任には、ちよつとびつくりしましたが、長年のマスコミ体験を世間がほおっておくわけもありません。あり余る才能を存分に活かして、若い後進のためにもぜひ頑張ってくださいたいものだと思います。なお、本誌には八月号まで執筆を予定されておりますので、どうぞご期待ください。

● 「念仏信仰と武士道」は本号で第三回の連載となりましたが、高橋富雄氏の文章は平易で読みやすいということと、内容がわかりやすいという評判をいただいております。もともと浄土宗布教師大会の講義を再録したもので、すなわち、いかに講義を聴いているのは当然としても、今月の熊谷蓮生房出家のいきさつなどは、『法然上人行状画図』に対する正しい評価につながるお話だと思えます。

● 袖山榮真師から「アニミズムを生きたる」を頂戴しました。それにつけても、東京という表面的には股賑をきわめる大都会で生活をしていると、かつてあ

れほど目に親しんだ蛙にすらも会う機会が少なくなりました。ことに暗然たる思いがいたします。「あぶれたオスが葬められている」のを聞き、早速「善は急げ」とばかり、春の嵐を衝いて〇邸に立ち寄り、志ん生に、ようすのいい、と評価してもらえそうなオスを一匹、雑巾で引つ掴んで奥入させた。のくだりを読んで、イイトシラシタ。昔の昆虫少年のありさまが活写されているのに思わず微笑がもれました。そして、やはりこれは大自然を背景に持つ信州なんだな、と半ば羨望すら覚えたことでした。生物のいのちの神秘に眼を見開き、彼も我も同じ地球生物社会の一員なのだ、という平衡感覚を恢復した時、初めて「殺生戒」のルールを体解するという結論へ導く見事さにも感嘆いたしました。

● 「浄土」の編集は、まだ思考錯誤のくり返します。先月などは単純な校正ミスや写真とキャプションの位置違いなど、お見苦しいことが多すぎました。伏してお詫言を申しあげます。

(編集スタッフ：小川有順)
編集スタッフ

栗田順一
齋藤晃道
細田芳光
大室照道
太田正孝
長谷川岱潤
村田洋一
石上俊教

浄土

六十巻 五月号 頒価五百円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷 平成六年 四月二十五日
発行 平成六年 五月 一日

編集人 宮林昭彦

発行人 牧田諦亮

印刷所 株式会社 文化カラー印刷

写真植字 文化フォントタイプ

〒一〇五 東京都港区芝公園四七四 明照会館内

発行所 法然上人顕仰会

電話 〇三三三 五七八六 九四七

FAX 〇三三三 五七八七 〇三六

●お知らせ

本誌をまとめて購入希望の方は、一部以上を単位に法然上人顕仰会までお問い合わせください。頒価その他について詳しくご説明申し上げます。なお、四月号以降の分も残部が少々ございます。

●お願い

本誌「浄土」への投稿は随時受け付けております。ただし、採否に関しては編集部にご一任ください。また、原稿は原稿として返却いたしませんので、必要の方は必ずコピーをお取りの上お送りください。なお、採用させていただいた分には規定の稿料を進呈いたします。そのほか、ご意見、ご希望がありましたら遠慮なくお寄せください。特に締切日は設けておりません。

編集部



SAPPORO

私たちは味わいライフを追求します。

うまい、うまいで、カロリー半分。 自信作〈カロリーハーフ〉



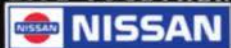
サッポロ生ビール カロリーハーフ

飲酒は20歳をすぎから

●ご協力をお願い：自動販売機による酒類の販売は、午後11時から午前5時まで停止されています。

サッポロビール株式会社

LIFE TOGETHER



人間のやさしさをクルマに。

スピードおさえて、いい運転。シートベルトをしめましょう。

姿と、かたち。



これが、新しいセドリック

高級車を造る最大の要素は、その姿とかたちである。
つくし手の強い意志が表はれる姿と、それを忠実に具現化した正統のフォルム。すなわち、かたちである。
まず、姿がいい。かたちがいい。新しいセドリックを見てほしい。

Cedric

日産のかたちを見てください。PHOTO: セドリックV30 ツインカムターボ プロラム

VIP ●全長4800×全幅1745×全高1410(mm)主
な装備 ●VG30DET (V6 ツインカムターボ・総排気量2960cc) エンジン ●最高出力255PS/6000rpm (※NET値) ●最大トルク35.0kgm/
3200rpm ●フルレンジ電子制御4速オートマチック(E-AT) (※NET値) とは、エンジンを車両に搭載した状態とほぼ同条件で測定したも
の。日産自動車株式会社お客様相談室 ●全国共通フリーダイヤル0120-315-232 お近くのローレル販売会社へ。